

薬学生の社会活動の意義

○辻本 雅和¹, 金子 文恵¹, 菅井 千尋¹, 谷川 大夢¹, 初鹿野 敬太¹,
向笠 知代¹, 串田 一樹¹(¹昭和薬大)

【はじめに】平成18年4月から始まった薬学教育は、信頼できる薬剤師の養成ということから、医療人として、また薬剤師としての資質を育む必要がある。薬学教育モデル・コアカリキュラムの教育ニーズを満たすだけでなく、次世代の薬剤師養成の視点から様々な工夫を必要とし、個別の機会を提供してカリキュラムの補完をする必要がある。今回、週末や休暇を利用して行った学年横断的な学生の社会活動について報告する。

【地域活動】町田市内にある地域包括支援センターと協同で、地域住民に対するお薬講座を開設し5年目を迎えた。学生が介護保険、一般用医薬品販売制度の解説や高齢者に向けたリハビリ体操などを指導しながら、地域住民との交流を深めている。教室で学ぶことも大切であるが、地域に出かけることによって、学生にとって地域が実践的な教育の場になっている。

【サマーキャンプ参加】重症心身障害児のサマーキャンプに参加し、多くのボランティアと一緒に、自立した生活が難しい子供たちの日常生活を支えることによって、障害児との交流を深めることが出来た。特に、服薬の自立が難しい子供達から薬について考える機会を得られたことは、教室では得られない実社会の教育であった。

【合同セミナー】3大学の3研究室で合同セミナーを開催している。学生として、地域の社会活動で学ぶだけでなく、一番身近な薬学生同士が交流することも必要である。この活動には、1研究室ではできないことが、合同セミナーの形式では可能になり、薬学生として同世代が何を考えているのか、交流を通して自分の存在を認識できる機会となっている。

【まとめ】薬学生は、18歳から24歳という自身の成長とともに、専門教育をうける6年間なので、いろいろな機会を提供して、6年間の成長を見守る必要がある。それによって学生に変化が生まれることになる。